

【調査の概要】

1 調査の目的

この調査は、若年者がどのような海外就業体験に参加しているのか、その経験に至るまでの教育・職業的経験がどのようなものだったのかといった実態を把握するとともに、若年者が体験を通じてどのような知識・技能を獲得し、また職業観・人生観を形成していったのか、そしてそれらを通して帰国後にどのような職業選択やキャリア形成の道を辿っているのか、海外就業体験の影響・効果についても明らかにすることを目的として実施した。

2 調査の対象

調査対象者は、海外就業体験に参加した人であって、出国時に35歳未満であり、かつ、2003年12月までに帰国した6,411人。

なお、調査対象者の抽出は、海外就業体験をあっせん・支援する主要な企業・団体に対し、全体で6,500人の抽出を前提に、各企業・団体のあっせん実績に応じて割り当てた数の抽出を依頼して行った。各企業・団体によるワーキング・ホリデーと国際インターンシップのあっせん実績の比率は概ね6:1であったが、後者の体験者数も一定数抽出するため、体験者の抽出に当たっては全体で概ね3:1になるように調整した。

3 調査の時期

平成16年8月1日現在の状況について調査を行った。

4 調査事項

- (1) 調査対象者の属性
- (2) 海外就業体験の動機・就業体験の内容、体験を通じて修得した知識・技能等について
- (3) 海外就業体験前の就業経歴・語学能力等について
- (4) 海外就業体験後の就業経歴・語学能力・今後のキャリア設計等について
- (5) 海外就業体験に対する支援策について

5 有効回答率

24.1% (有効回答数1,538)

6 調査の実施機関

(財)海外職業訓練協会(会長 浜田 広) 千葉県千葉市美浜区ひび野1-1
調査研究担当: 国際交流部長 安藤峰男(電話 043-276-7245)

本アンケート調査は、厚生労働省が(財)海外職業訓練協会に委託して実施している「海外就業体験が若年者の職業能力開発・キャリア形成に及ぼす影響に関する調査研究」(座長: 吉本圭一・九州大学大学院人間環境学研究院助教授)における調査活動の一環として行われたものである。(委員名簿は別紙のとおり)

【結果の要旨】 (単純集計結果の概要)

調査対象者の属性に関すること

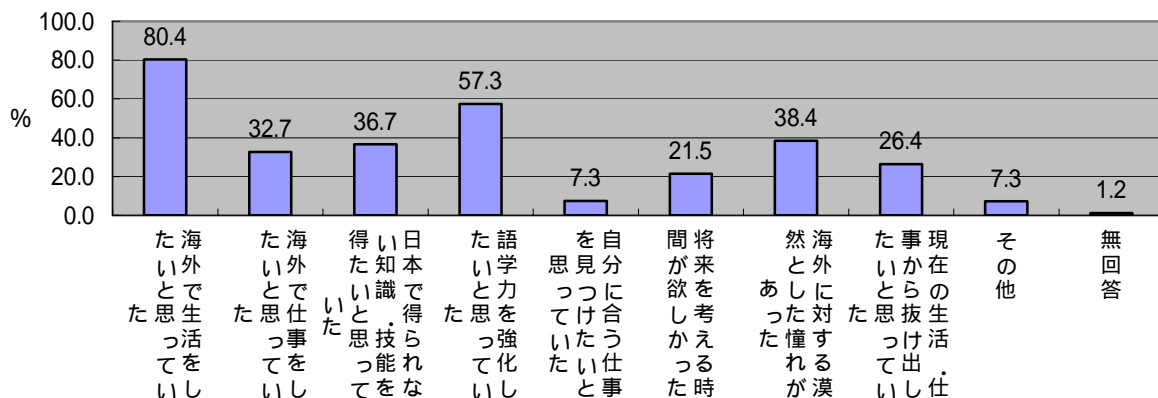
- 1 調査回答者の平均年齢は 27 歳 10 ヶ月であり、男女比では男性が 18.9%、女性が 81.0%となっている。
- 2 調査回答者のうち、ワーキング・ホリデーの経験者は 72.9%、国際インターンシップの経験者は 21.3%、両制度の経験者が 1.8%となっている。

海外就業体験の動機・内容等に関すること

1 海外就業体験の動機

海外就業体験に参加する動機を見ると、「海外で生活をしたかった」というのが 80.4%で最も多く、次いで「語学力の強化」が 57.3%、「海外に対する漠然とした憧れ」が 38.4%などとなっている。(図 1)

図1 海外就業体験の動機(複数回答)



2 海外就業体験に対する親の態度

海外就業体験に対する親の態度は、「本人の意志を尊重してくれた」が 52.5%で最も多く、次いで「積極的に賛成してくれた」が 20.4%、「本人の決めたことだと諦めた」が 17.8%、「反対した」が 6.1%などとなっている。

3 海外就業体験の渡航先

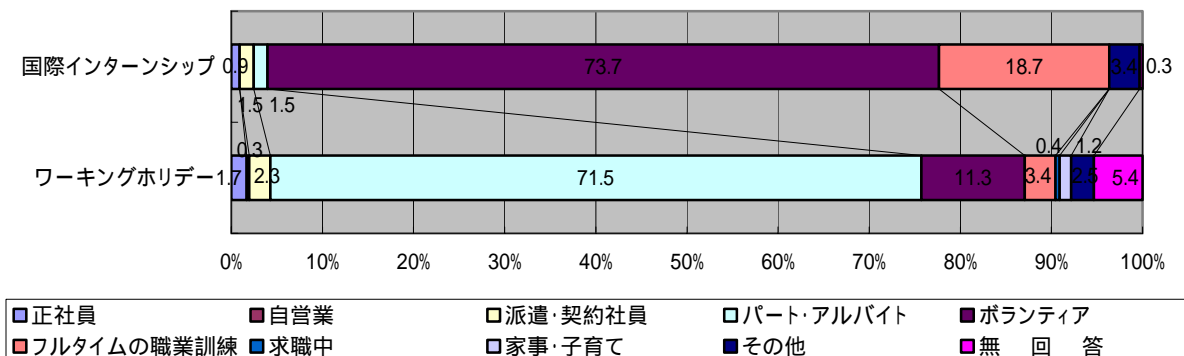
海外就業体験の渡航先としては、オーストラリアの 43.4%、ニュージーランドの 17.4%、カナダの 16.8%、米国の 8.6%、イギリスの 4.0%などとなっており、米国を別にすれば、ワーキング・ホリデー対象国の中の英語圏に集中している。

4 海外就業体験の種類

海外就業体験の種類としては、最も多いのが「パート・アルバイト」の 53.8%であり、次いで「ボランティア」の 26.7%、「フルタイムの職業訓練」の 7.0%などとなっている。これをワーキング・ホリデーと国際インターンシップのプログラム別で見ると、ワーキング・ホリデーでは

「パート・アルバイト」が71.5%を占めているのに対し、国際インターンシップでは「ボランティア」が73.7%を占めている。(図2)

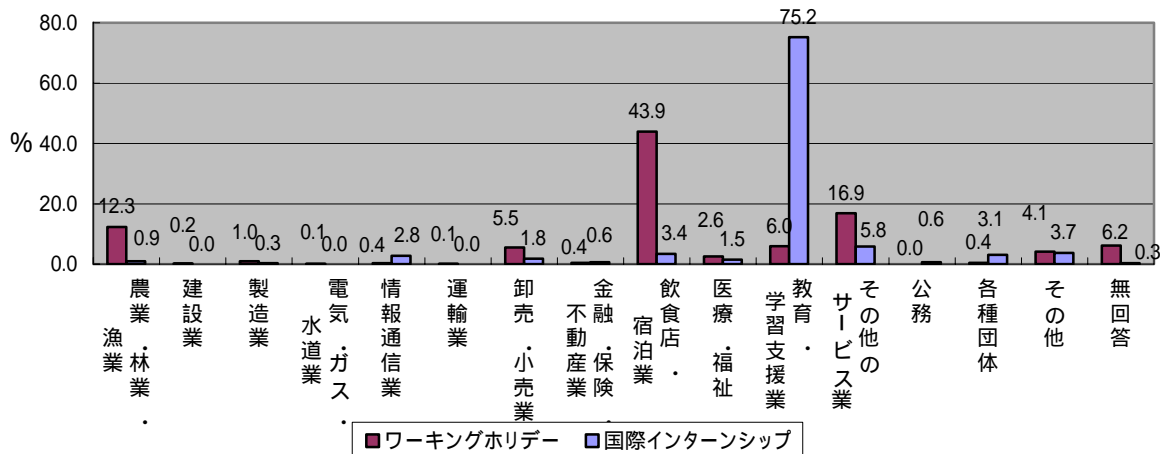
図2 海外就業体験の種類



5 海外就業体験の業種・職種

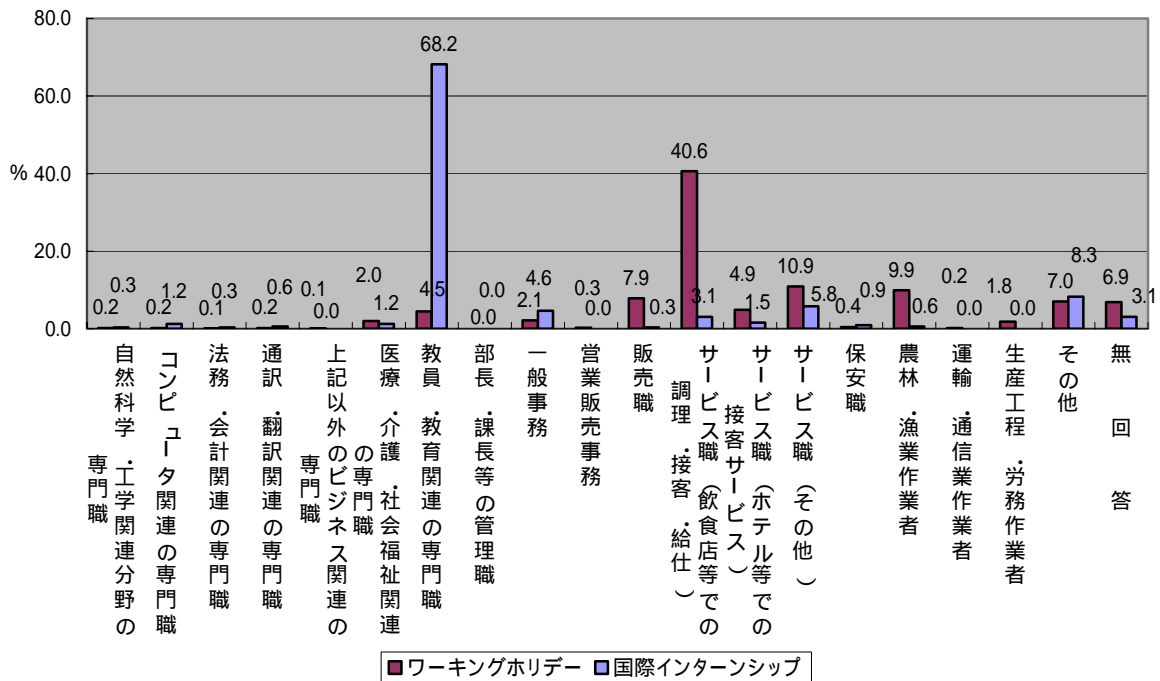
(1) 海外就業体験の業種としては、「飲食店・宿泊業」の33.7%が最も多く、次いで「教育・学習支援業」の22.5%、「その他のサービス業」の14.6%などとなっている。これをワーキング・ホリデーと国際インターンシップのプログラム別で見ると、ワーキング・ホリデーでは「飲食店・宿泊業」が43.9%と最も多くなっているのに対し、国際インターンシップでは「教育・学習支援業」が75.2%で最も多くなっている。(図3)

図3 海外就業体験の業種



(2) 海外就業体験の職種としては、「サービス職(飲食店等での調理・接客・給仕)」の31.1%が最も多く、次いで「教員・教育関連の専門職」の19.7%、「サービス職(その他)」の9.9%などとなっている。これをワーキング・ホリデーと国際インターンシップのプログラム別で見ると、ワーキング・ホリデーでは「サービス職(飲食店等での調理・接客・給仕)」が40.6%と最も多くなっているのに対し、国際インターンシップでは「教員・教育関連の専門職」が68.2%と最も多くなっている。(図4)

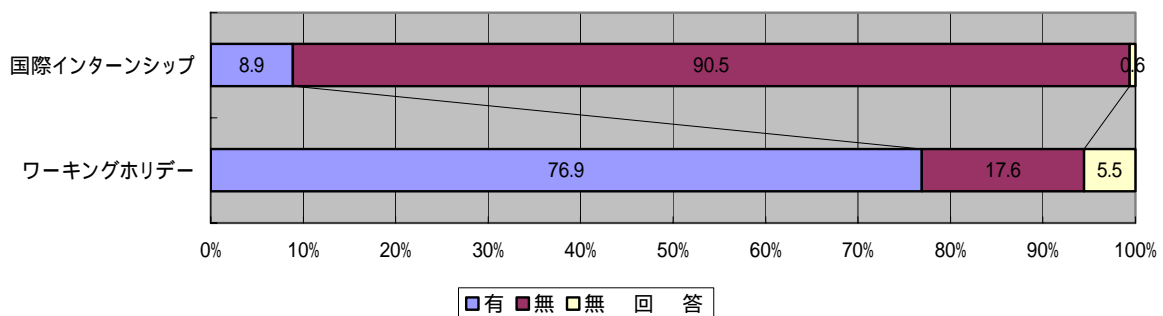
図4 海外就業体験の職種



6 海外就業体験における報酬の有無

海外就業体験における報酬の有無を見ると、「有」が59.9%で、「無」が35.4%となっている。これをワーキング・ホリデーと国際インターンシップのプログラム別で見ると、ワーキング・ホリデーでは「有」が76.9%を占めているのに対し、国際インターンシップでは「無」が90.5%を占めている。（図5）

図5 海外就業体験における報酬の有無



7 最も役に立ったと思う海外就業体験の内容及び諸条件

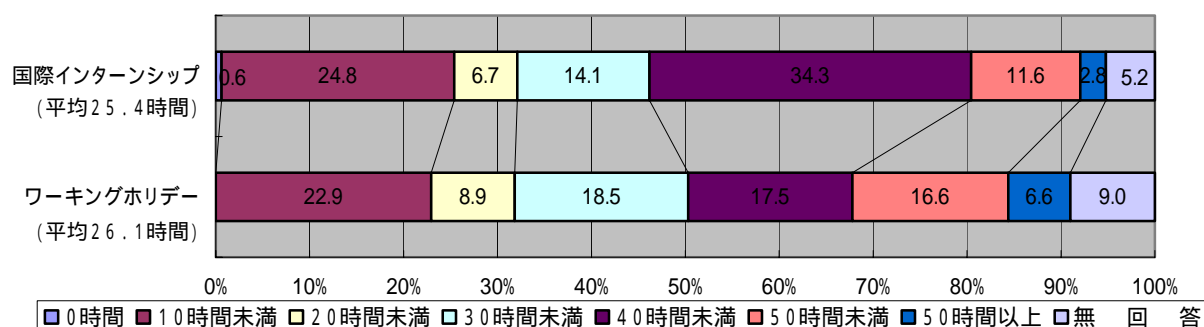
(1) 自分にとって最も役に立ったと思う海外就業体験について、その経験で期待されていた学力レベルを見ると、「高卒程度」が44.4%で最も多く、次いで「高卒未満」の15.3%、「大卒程度」の13.5%、「短大・専門学校卒程度」の13.0%などとなっている。

(2) 自分にとって最も役に立ったと思う海外就業体験について、その経験で期待されていた外国語能力を見ると、「日常会話で最低限のコミュニケーションができる」が42.8%で最も多く、次いで「仕事で簡単なコミュニケーションができる」が32.7%、「特に必要なし」が9.5%、「仕事

でほぼ不自由なくコミュニケーションができる」が8.4%などとなっている。

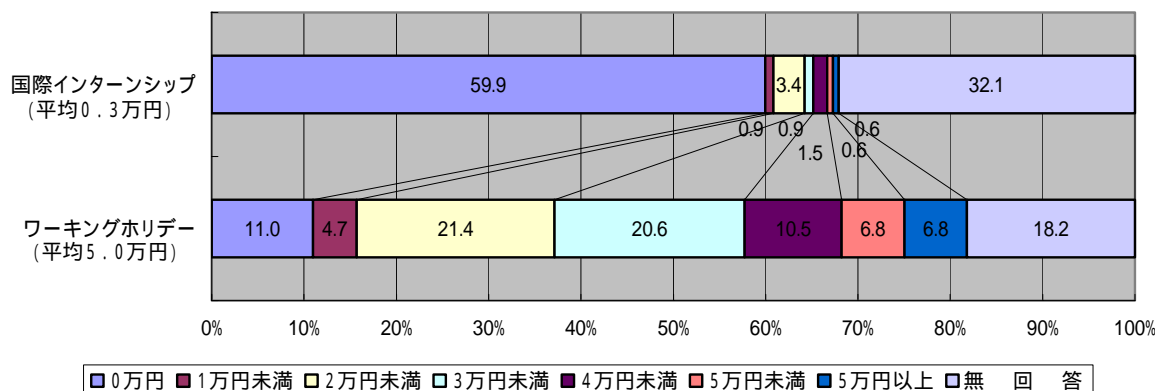
(3) 自分にとって最も役に立ったと思う海外就業体験の週当たりの平均労働時間は25.8時間となっている。これをワーキング・ホリデーと国際インターンシップのプログラム別に見ると、ワーキング・ホリデーで26.1時間、国際インターンシップで25.4時間であり、あまり大きな差はない。(図6)

図6 最も役に立ったと思う海外就業体験
週当たり平均労働時間



(4) 自分にとって最も役に立ったと思う海外就業体験の週当たりの平均給与は3.95万円となっている。これをワーキング・ホリデーと国際インターンシップのプログラム別に見ると、ワーキング・ホリデーで5.0万円、国際インターンシップで0.3万円であり、後者の多くはボランティアという立場で就業体験していることを裏付ける結果となっている。(図7)

図7 最も役に立ったと思う海外就業体験
週当たりの平均給与

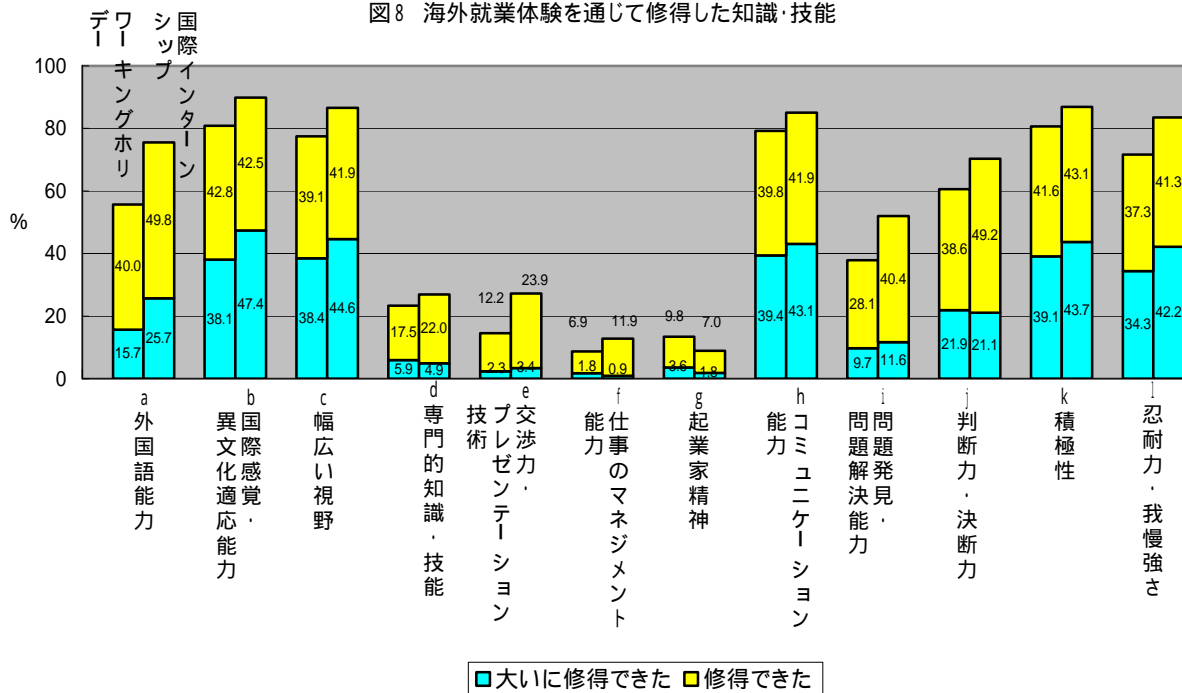


8 海外就業体験を通じて修得した知識・技能

海外就業体験を通じて修得した知識・技能を見ると、「国際感覚・異文化適応能力」の82.8%（「大いに修得できた」、「修得できた」の合計。以下同じ。）、「積極性」の82.1%、「コミュニケーション能力」の80.5%などとなっている。

これをワーキング・ホリデーと国際インターンシップのプログラム別に見ると、前者では「国際感覚・異文化適応能力」の80.9%、「積極性」の80.7%、「コミュニケーション能力」の79.2%の順で高くなっており、後者では「国際感覚・異文化適応能力」の89.9%、「積極性」の86.8%、「幅広い視野」の86.5%の順で高くなっている。(図8)

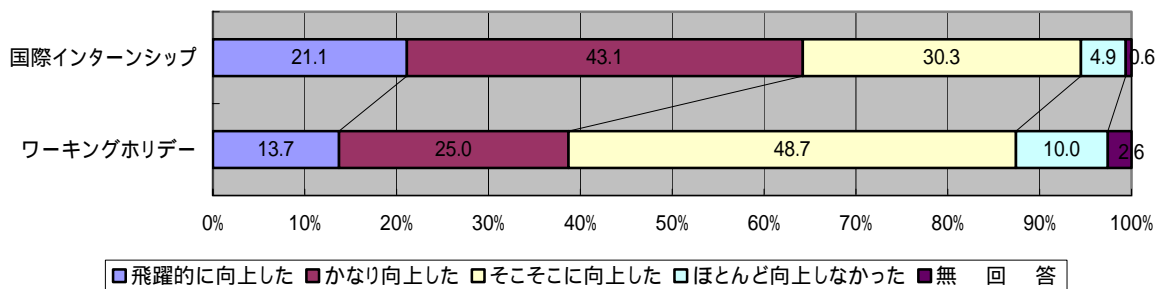
図8 海外就業体験を通じて修得した知識・技能



9 海外就業体験を通じた外国語能力の向上程度

海外就業体験を通じた外国語能力の向上程度をワーキング・ホリデーと国際インターンシップのプログラム別に見ると、前者では「そこそこに向上した (TOEIC で 50 点程度以内のアップ)」が 48.7%、「かなり向上した (TOEIC で 50～150 点程度のアップ)」が 25.0%、「飛躍的に向上した (TOEIC で 150 点程度以上のアップ)」が 13.7%となっており、後者では「かなり向上した」が 43.1%、「そこそこに向上した」が 30.3%、「飛躍的に向上した」が 21.1%となっている。(図9)

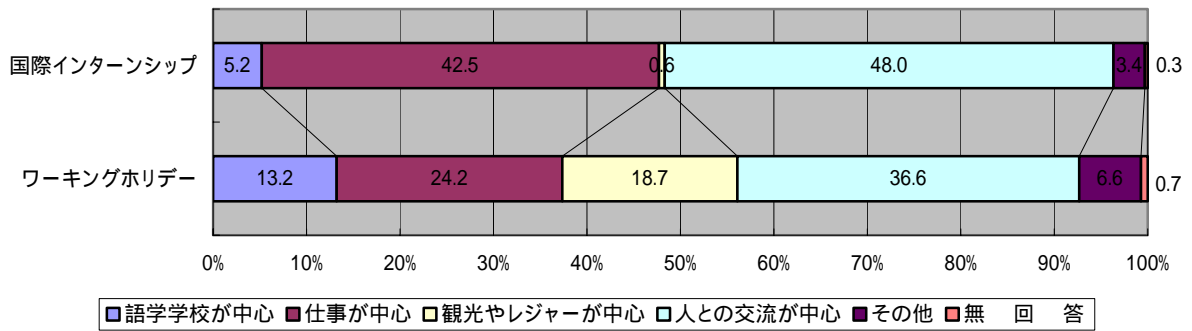
図9 海外就業体験を通じた外国語能力の向上程度



10 海外就業体験期間中における過ごし方

海外就業体験期間中における過ごし方をワーキング・ホリデーと国際インターンシップのプログラム別に見ると、前者では「人との交流が中心」が 36.6%、「仕事为中心」が 24.2%、「観光やレジャーが中心」が 18.7%となっており、後者では「人との交流が中心」が 48.0%、「仕事为中心」が 42.5%、「語学学校が中心」が 5.2%となっている。(図10)

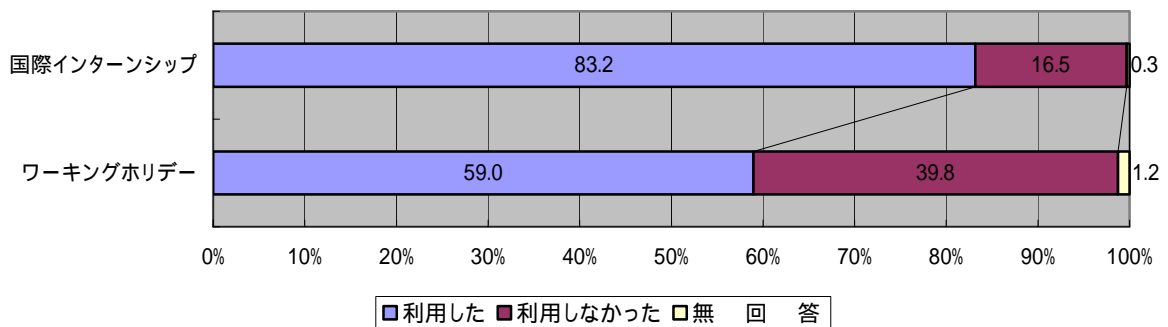
図10 海外就業体験中における過ごし方



1.1 海外就業体験に関するあっせん・支援業者の利用とその満足度

(1) 海外就業体験を行うに当たって、就業先のあっせん、渡航手続きの支援等を行う業者を利用したかどうかをワーキング・ホリデーと国際インターンシップのプログラム別に見ると、前者では「利用した」が59.0%、「利用しなかった」が39.8%となっており、後者では「利用した」が83.2%、「利用しなかった」が16.5%となっている。(図11)

図11 海外就業体験に関するあっせん・支援業者の利用



(2) あっせん・支援業者のサービスについて、その利用者がどのような印象を受けているかを見ると、ワーキング・ホリデーも国際インターンシップのいずれも「サービス内容は良かったが、費用も高かついた」が最も多く、前者で41.6%、後者で56.6%となっている。(図12)

図12 海外就業体験に関するあっせん・支援業者の満足度
利用した有料サービスの内容等の印象

